「見えない美」を追い求めて

造形論の視点から熊谷守一を捉え直す試み

古川秀昭 著
▶熊谷守一
目に見えないものを
9・10刊 四六判288頁 本体3200円
ミネルヴァ書房

石崎 尚 2020年1月25日(土)
『図書新聞』
3432号

美術館で働いていると、比較的近い時代のことであっても、生年月日すら良く分からない画家を調べなければならないことが多々ある。そうかと思えば、毎年のように評伝や関連書籍が出版される美術家もいる。幸い、この本が扱う熊谷守一は、展覧会にも書籍にも事欠かない、後者の部類に入るだろう。とりわけ昨年は東京国立近代美術館での回顧展と、映画『モリのいる場所』の公開が重なったためか、これまで以上に知名度を上げ、新しい層の観客を獲得したようだ。合わせて評伝などの出版も相次いだが、こうした一種の「クマガイブーム」がひと段落してから出た本書には、充実した研究が一通り揃った後で執筆されたという、後発ならではのメリットがある。

この点は著者も十分に意識しており、「熊谷守一の歩みについては何も書き記すことはない」（二頁）と割り切って、作家の略歴などは先行研究に委ねている。だから、率直に言ってしまえば、自殺した女性の死体との遭遇が画業の転機になったことや、作曲家の信時潔との交流が重要な意味を持つ、などの指摘は、これまでも何度も繰り返されてきたものだ。だが、そうした素材を組み合わせた上で、著者が最も興味を抱く、熊谷の視線のあり方に焦点を絞っていることに本書の特徴がある。

著者の狙いは明快だ。熊谷が追い求めた「見えない美」とはいかなるものか、それはどのようにして絵画によって掴みうるのか、というテーマを設定し、本書の中で繰り返しその問いに立ち戻っている。これは言い換えれば、造形論の視点から熊谷守一を捉え直そうという試みに他ならない。その特異なキャラクターを面白がって消費する傾向からは距離を取って、画家が作品の中で追求したものを明らかにしようというのだ。こうしたアプローチは、先述の回顧展でも見られたものだが、近年の熊谷研究における有意義な進展といえるだろう。無論、従来の研究が熊谷の造形的な特徴を等閑視してきたという訳ではない。けれども、「見えない美」を美術作品として如何に「見える形」にするか、という矛盾にも思える実験に熊谷が取り組んでいたという論点は、いわば造形芸術の限界に挑んだ（つまり正統な前衛の）画家として熊谷を捉えている点で刮目すべきものである。本書の第一の功績はここにあるだろう。加えて、学生時代の作品について「月並みな美校生作品」（四〇頁）と評するなど、題材となる人物を安易に持ち上げるのではなく、自らも画家として活躍する著者が、確かな眼を駆使して語っていく際の、対象との適切な距離感は特に頼もしい。

この点で、本書の最後に位置する「作品で辿る守一の戦後」と題した第五章は、具体的な作品に即して分析が進められている点で、実に読み応えがある。評者は「どの猫も特別に妙に耳先が尖っている」（一九四頁）という指摘を読んで、いますぐ実物を見て確認したいという衝動に駆られた。優れた作品分析は、それを読んだ者の眼を導いてくれる。猫の耳の先端が気になりだした読者は、トンボの翅の、あるいは蟻の足の描き方が何故こうなっているのかと、他の作品についても観察と思考を深め始めるからである。

本書の第二の功績は、そうした孤高の挑戦を続けた熊谷という画家の存在に、一方である種の普遍性を与えようとしている点である。換言すれば「見えない美」に同様に近づこうとしていた他の人々との接点を明らかにし、そうした相関性の中で熊谷の存在を位置づけようとしているのだ。それゆえ、夏目漱石や木村定三など、熊谷を語る際に出てくる常連の名前の他に、本書にはマタイの福音書やメルロ＝ポンティ、ディキンスン、久松真一など、これまで熊谷守一とはあまり関係づけられてこなかった文献からの引用や考察も数多く含まれている。こうした網の目が丁寧に張り巡らされることによって、あらゆる角度からこの画家が探し求めた「見えない美」を理解するためのヒントが提示されている。

この本が、「日本評伝選」というシリーズの中の一冊として刊行されたことも興味深い。西欧の追随ではなく、自らの中に深く沈潜することでラディカルな地点に到達した熊谷の生き方には、行き詰まりを見せる日本社会が今こそ参照すべきヒントが隠されているからだ。一つの疑問を抱いたら、とことんまで追求するというその生き方。他人の生涯から教訓めいたものを引き出すのは、熊谷本人が最も嫌いそうなことではある。しかしなお、情報の洪水に押し流されて、何が本当のことで何がそうでないのかを見極めにくくなってしまった今の時代に生きる我々は、この本から様々な示唆を得ることだろう。何故なら、ものの確かなありようを厳しく見つめようとする態度は、美術に関わる人々だけではなく、本来は全ての人間にとって生きる上で不可欠なものなのだから。

（愛知県美術館主任学芸員）